

## 【表紙写真解説】

小半鍾乳洞は入口が高さ三呎、幅三呎と広く、奥行きは七〇呎を越える。洞内には「底無し之淵」と名づけられた深い地下水溜りをはじめ、何カ所もの水路があり、地下水が豊富。洞内は年間を通じて摂氏十五度ぐらいで冬は暖く、夏は涼しい。

また、鍾乳石や石筍も大小さまざまの形のものが多い数発達している。これらは石灰岩が二酸化炭素を含んだ地下水によつて溶かされたり、再結晶したりしてつくられたもの。粘板岩あるいは砂岩層がはさまれているために風化して付着し、灰色または茶色のものが比較的多く、粘土からなる泥筍もあちこちに見られる。さらに、景勝が五十数カ所あるが、その中の一つの宮殿にある「斜柱石」は世界でも小半鍾乳洞のものが唯一で、貴重な学術資料。

また、洞内全体が現在でも生きた活動を続けており、水滴は日々新しい景勝を形づくっているのも小半鍾乳洞の特色。

鍾乳洞は明治三十二年（一八九九）小半部落の小野勝次

郎・千木鉄治両青年によつて発見された。当時、因尾道路工事の進捗中で、あるいは二青年も雇われて、道路工事の余暇に、地下の秘密にいどんだものかもしれない。

その後、大正九年（一九二〇）二月、内務省の委嘱を受けた東京師範学校理学博士佐藤伝蔵教授により、続いて同年八月、東京帝国大学理学博士神保小虎教授によつて学術調査が行われた。その調査報告書にもとづき、内務省は大正十一年三月、小半鍾乳洞を国の天然記念物に指定、今日に至っている（引用資料は『ほんじょうの文化財』・『本匠村史』・『大分県の文化財』・『豊後水道ぶらり旅』を使用した）。（矢野）

### 見明峠

宇目町の見明と直川村の横川の境にある峠。県道上（ぶらり）瓜清見園線が通る。標高二四〇トメ。

江戸期にはこの峠道は佐伯城下と岡城下を結ぶ両藩の官道であり、同時に佐伯から日向国へ向かう重要な道であった。『豊後国古城蹟并海陸路程』には、佐伯側からみて「田市村より未之方は、中川内膳正領分。みあかり村境め迄五里。牛馬の通ひ吉。」とある。岡藩側から、「酒利村大道わかれより佐伯境、見明村迄五里。平地也。」とあり、道の整備はよかつたようである。現在、自動車を通れる。（『宇目町誌』）